

税理士から年間203件の
相談を受ける元国税調査官が執筆

税務調査の不安を払拭！

「貸倒損失」 徹底解説 レポート

株式会社 KACHIEL

代表取締役 CEO

久保 憂希也

KUBO YUKIYA

貸倒損失について
専門書などにも
載っていない事を
専門書以上に詳しく
分かりやすく解説

民法改正の影響も含めて
「総論」を解説した上で
不明確な計上基準など
それぞれの論点を
20,000字超の
レポートとして執筆

～専門書にすら載っていない・・・税理士・会計事務所の超実務書～
貸倒損失の税務判断基準・正しい法的的理解・更正の請求

目 次

プロフィール	1
貸倒損失の総論・全体像	2
債権は時効で消滅したのか？	5
時効の援用とは何か？	8
時効期間は何年なのか？	11
債務免除（債権放棄）する	14
債務免除で寄附金課税になる場合	17
債権の一部を債務免除は認められるか？	21
法律上の貸倒れ全般	24
貸倒通達9－6－1になぜ【破産】が載っていないのか？	27
取引先（法人）の破産はいつ貸倒損失が計上されるのか？	29
破産の貸倒損失に関する裁決事例を正しく理解する	32
個人（事業主）の取引先が破産した場合の貸倒損失計上の考え方	35
「法律上の貸倒れ」の流れと時期	39
「事実上の貸倒れ」の論点・注意点	44
「形式上の貸倒れ」の論点・注意点	46
貸倒損失の立証責任は国税か納税者か？	48
破産を事由とした貸倒損失の更正の請求をする場合の注意点	51
貸倒損失で更正の請求をする根拠をどう明示するか？	54
貸倒損失の実務判断（総論）と注意点	59

PROFILE

久保 夢希也（くぼ ゆきや）元国税調査官
株式会社 KACHIEL 代表取締役／CEO



1977年 和歌山県和歌山市生まれ
1992年 智弁学園和歌山高校入学
1995年 慶應義塾大学経済学部入学
2001年 国税庁入庁 東京国税局配属
2008年 株式会社 InspireConsulting を設立

税務調査のコンサルタントとして活動。2011年より全国で税務調査対策研究会を開催し、1,000人超の税理士に「税務調査の正しい対応方法」を教えている。

また、税理士が質問・相談できる会員制サービス「習得会」には500名以上が入会しており、年間約1,000件の税務調査に関する質問を受けています。

【講演実績】

- 東京税理士会認定研修「税務調査の徹底講座」
- 九州北部税理士会・博多支部「税務調査の極選ノウハウ」
- TKC北陸会「税務調査の正しい受け方・適正な反論のやり方」
- 岐阜青年税理士連盟「税務調査のイロハ」
- 中国ミロク会計人会「重加算税の賦課要件と立会い時の対応方法」など多数



CHAPTER 1

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

貸倒損失の総論・全体像

税理士・会計事務所の実務上よく出てくる貸倒損失ですが、

特別損失に計上する

⇒ 税務調査に選定されやすい

- ⇒ 貸倒損失の計上基準が不明確（実際には所得が計上された期に計上、もしくは気付いた期に計上しているなど）
- ⇒ **損金性の否認または期ズレ**、さらには5年以前の貸倒損失で時効（永久差異）

など、論点が多い項目であり、かつ多額になりやすいので注意が必要なのですが、意外に深く考えられていない論点もあります。

また、民法改正（時効など）の影響も含めて、まずは「総論」を解説したあと、次項以降で順次、各論点を細かく解説していきます。

まず、法人税法上は貸倒損失を個別に定めた法律規定はなく、第22条3項3号の「損失の額で資本等取引以外の取引に係るもの」に該当すれば損金になるという考え方です。そのうえで、貸倒損失が上記の「損失」に該当するのか判断基準が曖昧であることから、通達9-6-1～9-6-3が基準の例示として規定されています。貸倒損失が「損失」になるかどうかは、金銭債権が社会通念上、回収が不可能と評価できる事実が必要（課税要件）になることから、

(1) 法的に債権が消滅した場合

もしくは

(2) 法的には残っているものの実質的に回収不能である場合

に該当するかどうかで判断するのが本論です。

通達9-6-1は上記（1）の例示であり、通達9-6-2（および9-6-3）は上記（2）の例示と考えれば理解しやすいでしょう。

9-6-1：法律上の貸倒れ

9-6-2：事実上の貸倒れ

9-6-3：形式上の貸倒れ

実務上は、9-6-3から判断した貸倒損失の計上が多いとは思いますが、債権は法的に残っているものの、実質的に回収できない（と顧問先が言う）場合は、9-6-2の判断が必要なケースもあります。

貸倒損失の可否について税務調査では事実認定によるところが大きいため、督促・相手方の状況など、いかに客観的な事実を残すのかも大事になってきます。

CHAPTOR 2

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

債権は時効で消滅したのか？

債権は時効で消滅したのか？

税務調査において貸倒損失が問題になりがちなのは、貸倒損失を計上した内情が、

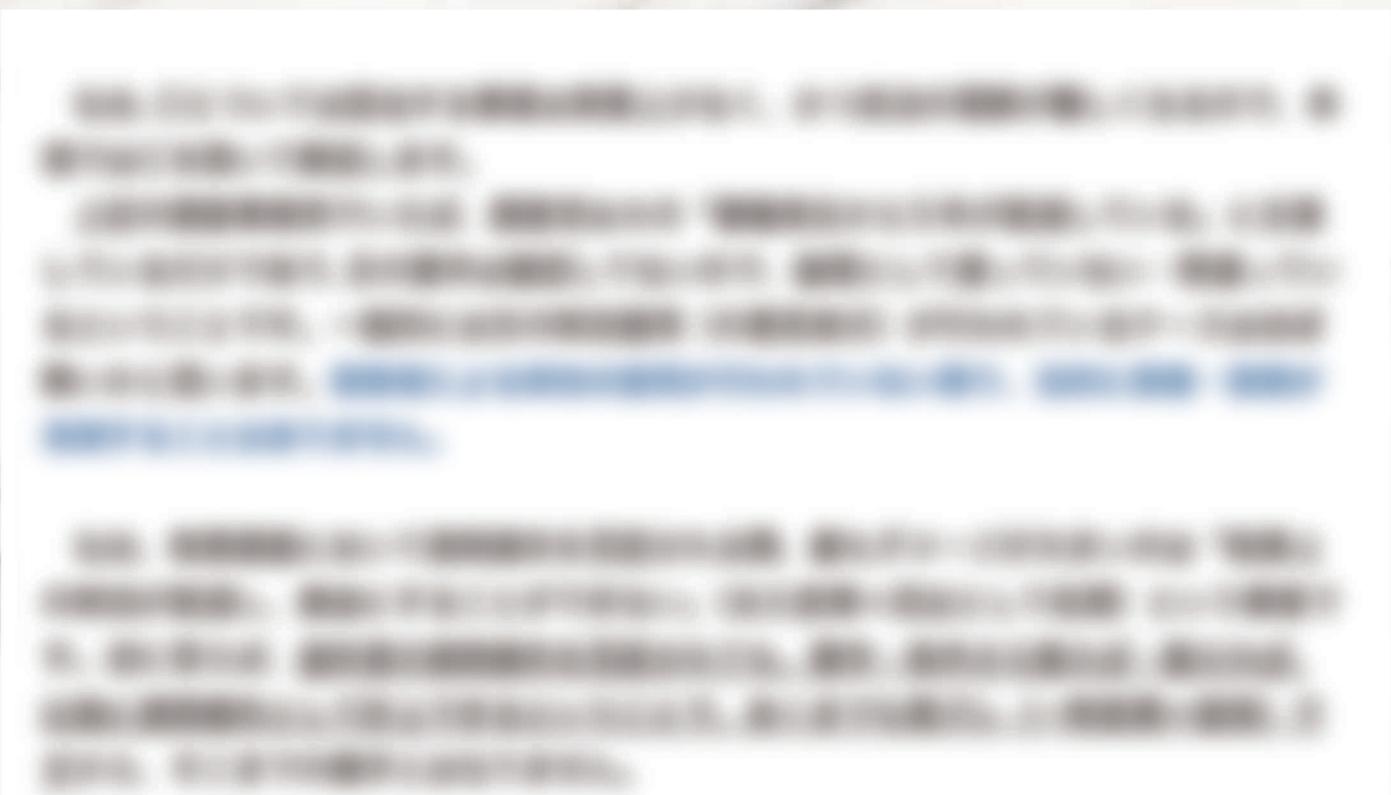
所得が（多額に）計上される（予定）

- ⇒ 所得・税額を減らす手立てを考える
- ⇒ 長年回収できていない売掛金を探す
- ⇒ それら売掛金全額を貸倒損失に計上すると欠損が生じるので一部だけ貸倒損失にする

というのが調査官に「見え見え」なので、調査では厳しく追及されることになります。

さて、現実の税務調査を見ていると、貸倒損失を否認指摘する調査官の論理・根拠が間違っていることが多いです。例えば、下記のような調査事案が典型例です。

債権は時効で消滅したのか？



CHAPTOR 3

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

時効の援用とは何か？

時効の援用とは何か？

では、債権・債務が消滅する要件の1つである「時効の援用」とは、具体的にどのような行為なのでしょうか？前項の繰り返しになりますが、債権の消滅時効が成立するには要件があり、

- A：時効期間が経過していること
- B：時効の援用がされていること
- C：時効の中止（更新）・停止（猶予）事由がない

を全て満たしていることです（Aだけが要件ではありません）。

時効の援用とは何か？

CHAPTOR 4

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

時効期間は何年なのか？

時効期間は何年なのか？

改正民法の施行が2020年4月1日にあり、その点も含めて解説しますが、直近の税務処理および税務調査ということであれば、旧民法・商法の適用も多いと思いますので、適用時期を中心に解説しておきましょう。

時効期間は何年なのか？

CHAPTER 5

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

債務免除（債権放棄）する

債務免除（債権放棄）する

さて、本項では貸倒損失として確実に損金計上したい場合の、実務的な対応方法として「債務免除（債権放棄）」を取り上げます。まず、典型的なケースで考えてみましょう。

- 相手方が破産・倒産などしていない
- 時効年数は確実に超過している（10年前の売掛金であるなど）
- 債務者は時効の援用をしていない（督促などの連絡をしてない・音信不通で連絡先もわからない等）
- 債権は実質的に回収不可能なので本期で貸倒損失に計上したい
- ただし、基本通達9-6-3に該当するか自信はない（督促行為など長年していない）、もしくは期ズレ・税務上の時効（5年超）と否認指摘されるリスクが高い

債務免除（債権放棄）する

CHAPTER 6

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

債務免除で寄附金課税になる場合

債務免除で寄附金課税になる場合

前項では、債務免除をすることで貸倒損失となることを説明しました。一方で、債務免除（債権放棄）さえすればどんな場合でも、貸倒損失が認められるのかといえば、そういうわけではありません。貸倒損失が認められる前提となる考え方は、「金銭債権が社会通念上回収が不可能と評価できる事実が必要（課税要件）」ということなので、

債務免除で寄附金課税になる場合



債務免除で寄附金課税になる場合



CHAPTER 7

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

債権の一部を債務免除は認められるか？

債権の一部を債務免除は認められるか？

ここまででは、債務免除（債権放棄）することで貸倒損失を計上する場合について解説してきましたが、今回は債権（売掛金・貸付金）の一部だけを債務免除することは認められるのかについて考えてみましょう。

債権の一部を債務免除は認められるか？

債権の一部を債務免除は認められるか？

●

債権の一部を債務免除は認められるか？

●

債権の一部を債務免除は認められるか？

CHAPTOR 8

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

法律上の貸倒れ全般

さて、ここからは貸倒損失について法人税基本通達9-6-1～9-6-3に沿って解説をしていきます。本項は9-6-1の「法律上の貸倒れ」ですが、9-6-1(4)の債務免除（債権放棄）はすでに解説しましたので、この点は取り上げません。

CHAPTOR 9

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

貸倒通達9－6－1 なぜ【破産】が
載っていないのか？

貸倒通達9－6－1 なぜ【破産】が載っていないのか？

さて、実務上は取引先が「民事再生法」などを適用するケースは少なく、「破産」していることがほとんどでしょう。ここでは、「なぜ破産が通達9－6－1に載っていないのか？」について解説しましょう。

CHAPTER 10

.....

取引先（法人）の破産は
いつ貸倒損失が計上されるのか？

取引先（法人）の破産はいつ貸倒損失が計上されるのか？

では、取引先の「破産」にかかる貸倒損失の計上時期はいつなのでしょうか。非常に重要な公開裁決事例を取り上げます。引用が長くなりますが、その判断内容を精査しましょう。

取引先（法人）の破産はいつ貸倒損失が計上されるのか？

CHAPTER 11

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

破産の貸倒損失に関する裁決事例を
正しく理解する

さて、前項の公開裁決事例では、国税側は破産＝通達9-6-2の適用だと主張しましたが、不服審判所はその判断を採用していません（課税判断は国税の主張が通っていますが、その考え方のプロセスは相違しています）。不服審判所は、あくまでも破産における通達9-6-2の適用は「破産終結決定前であっても配当がないことが明らかな場合」としています。情報を付加して時系列で整理すると下記になります。

破産の貸倒損失に関する裁決事例を正しく理解する

CHAPTER 12

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

**個人（事業主）の取引先が破産した
場合の貸倒損失計上の考え方**

さて、本裁決事例においてもう1つ重要な論点があります。それは、破産手続終結決定＝貸倒損失の計上という論理は「法人」に適用されるのであって、相手方・取引先が「個人（自然人）」であった場合には触れられていないということです。

なお、留意しておいていただきたいのですが、本項の論点について触れている書籍や記事はほぼ無く、裁決・判決も汎用性のある考え方を明示していません。このことから「明確な答えはありません」。重要なのは法人の破産との違いを理解することです。

会社名	業種	取引年数	取引額	貸倒損失額
株式会社ABC	製造業	10年	1,000万円	100万円
株式会社XYZ	貿易業	5年	500万円	50万円
有限会社PQR	小売業	3年	300万円	30万円
個人事業主S	飲食業	2年	200万円	20万円

個人（事業主）の取引先が破産した場合の貸倒損失計上の考え方

CHAPTER 13

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

「法律上の貸倒れ」の流れと時期

さて、ここまででは通達9-6-1における「法律上の貸倒れ」に加え、通達に明記されていない破産における貸倒損失の考え方を詳しく解説してきました。本項では、「法律上の貸倒れ」におけるその手続きの流れ、およびその流れにおける貸倒損失の計上時期について、図によって明示します。



「法律上の貸倒れ」の流れと時期



「法律上の貸倒れ」の流れと時期



CHAPTER 14

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

「事実上の貸倒れ」の論点・注意点

実務上は、9-6-1もしくは9-6-3を根拠とすることが多いわけですが、これは9-6-2における「債務者の資産状況、支払能力等からみてその全額が回収できないことが明らかになった場合」という基準が非常に不明瞭だからです。ですから実務上は、否認リスクを考えた場合、9-6-2を根拠とせずに、できれば9-6-1（さらにいえば「債務免除」）を適用することをお勧めします。

CHAPTER 15

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

「形式上の貸倒れ」の論点・注意点

実務上は、貸倒損失の計上根拠とすることが多い通達が9-6-3かと思いますが、9-6-2と同じで適用範囲が曖昧・不明瞭な規定です。

税務調査ではよく調査官から「督促しましたか?」「いつですか?」「何度ですか?」など聞かれますが、あくまでも通達の規定上は回収の努力を問うていないことから、そもそもこの問答が必要かすらよくわかりません(後述する立証責任の観点からは理解できますが、少なくとも通達には規定がありません)。

また、国税庁の質疑応答事例では、9-6-3の適用を認めていないケースとして下記があります。

「代理店契約の破棄を理由に支払拒絶を受けている債権」
<https://www.nta.go.jp/law/shitsugi/hojin/16/02.htm>



CHAPTER 16

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

貸倒損失の立証責任は国税か納税者か？

ここまで、貸倒損失に関して全般的に解説してきましたが、ここで重要な論点として「貸倒損失の立証責任」を取り上げます。

原則として、税務調査における否認（指摘）に関する立証責任は国税側にあります。

「立証責任が税務署側にある法的根拠」

<https://kachiel.jp/?p=10333>



ただし、貸倒損失の立証責任については少し事情が変わってきます。国税側に全面的に立証責任があるとすると、例えば、「相手方に連絡が取れない」「過去に督促をしたことがあるのか」など、貸倒損失を計上するに至った経緯・事情や、その時期・回収努力の状況などを国税側は実質的に事実認定ができない（納税者にしかわからない部分が大きい）と考えられているからです。ですから、貸倒損失に関する立証責任は、納税者側で対象となる債権の

- ・発生原因
- ・その内容
- ・誰に帰属するのか
- ・回収不能の事実

などについて具体的に主張する必要があり、そのためには、

貸倒損失の立証責任は国税か納税者か？

CHAPTER 17

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

**破産を事由とした貸倒損失の更正の
請求をする場合の注意点**

ここまででは、税務判断として貸倒損失として計上できるかについて、その各論を詳細に解説してきましたが、本項からは貸倒損失にかかる更正の請求をする場合の注意点です。現実的には、取引先の破産を後になって知ることも多いわけです。特に、BtoB の事業を行つており、かつ取引先・顧客数が多数である場合で、

- ・所得（利益）が多額にてた事業年度で貸倒損失の計上を検討する
もしくは
- ・関与が変わったタイミングで、売掛金等を精査して滞留債権をピックアップする

などは、後になって破産を知る機会になります。このような場合、更正の請求をすることになるわけですが、実務上は貸倒損失で更正の請求をする際に気を付けるべき点が非常に多くあります。下記は実際に、ある税理士事務所が経験した実例です。

破産を事由とした貸倒損失の更正の請求をする場合の注意点

貸倒損失の更正請求をする場合、以下の点に注意する必要があります。

- 貸倒損失の発生が確定していること
- 貸倒損失の額が明確であること
- 貸倒損失の原因が破産であることを証明する書類（破産開始決定書等）
- 貸倒損失の更正請求書（書面）

貸倒損失の更正請求書

貸倒損失の更正請求書

貸倒損失の更正請求書



貸倒損失の更正請求書

CHAPTOR 18

.....

貸倒損失で更正の請求をする根拠を
どう明示するか？

貸倒損失で更正の請求をする根拠をどう明示するか？

さて、前項では「破産を事由とした貸倒損失の更正の請求をする場合の注意点」について実務上重要な2つ取り上げましたが、本項では更正の請求で主張すべき根拠（法律・通達・裁決）について解説します。

更正の請求をする場合、その理由・事情の詳細などを記載のうえ、その理由の基礎となる「事実を証する書類」を添付しなければならないとされています（国税通則法第23条第3項・施行令第6条第2項）。特に、貸倒損失にかかる更正の請求の場合、税務署における机上確認は厳しくなり、一般的には口頭での説明を求められたり、追加の資料等を要請されることが多いのは周知のとおりです。

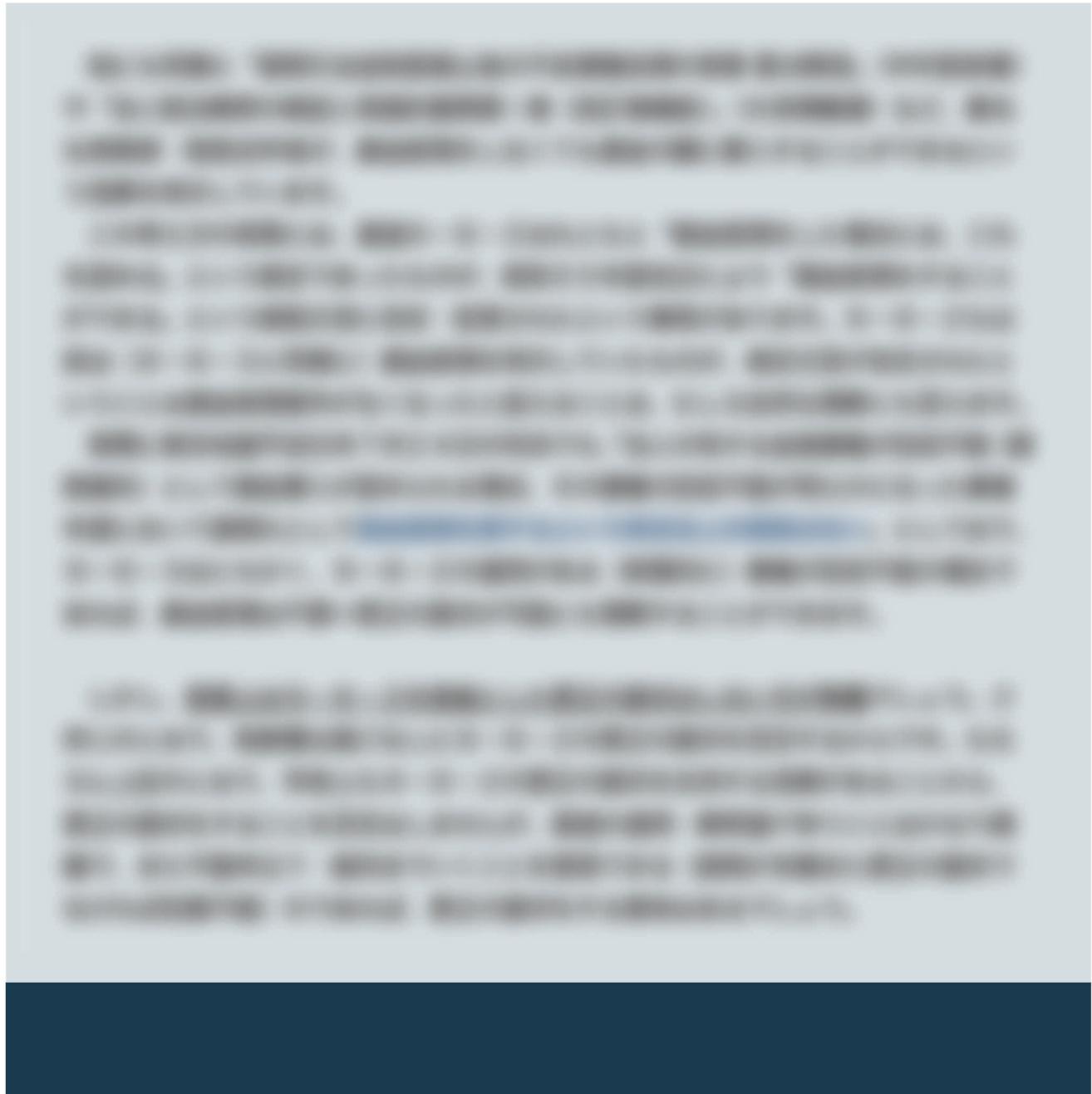
貸倒損失で更正の請求をする根拠をどう明示するか？



貸倒損失で更正の請求をする根拠をどう明示するか？



貸倒損失で更正の請求をする根拠をどう明示するか？



CHAPTER 19

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

貸倒損失の実務判断（総論）と注意点

ここまで貸倒損失、特に取引先の破産と更正の請求について細かく解説してきましたが、本項が最終となります。貸倒損失の総論（まとめ）とその他の注意点です。

そもそも論でいうと、貸倒損失の計上根拠は法人税法第22条第3項第3号の「損失の額で資本等取引以外の取引に係るもの」となります。そのうえで、貸倒損失が上記の「損失」に該当するのか判断基準が曖昧であることから通達9-6-1～9-6-3が基準の例示として規定されています。

このようなケースでは、更正の請求をするリスクやデメリットがなく、むしろ更正の請求をしなかったために時効＝貸倒損失が永久に損金にならないという大きなリスクが生じます。

最後の論点となりますのが、取引先に対する売掛金等が滞留した際に、分割払いなど許容する代わりとして、個人の（連帯）保証人を入れてもらうことが実務上よくあります。このようなケースで、取引先が破産したが（連帯）保証人がいる以上は、貸倒損失が計上できない（通達9-6-2の適用がない）と勘違いしている場合が多いです。下記、国税庁の質疑応答事例に明記されている通り、

（略）